

氏名	加仲 真理子 (学籍番号 16DN02)		
学位の種類	博士(看護学)		
学位記番号	22号		
学位授与年月日	2021年3月11日		
論文題目	搾乳中の早産児の母親に対する乳汁分泌維持促進のための乳房自己管理支援モデルの作成—母親の乳房感覚を強化して—		
論文審査担当者	委員長	久保田 君枝	教授
	委員	有菌 信一	教授
	委員	鶴田 恵子	教授
	委員	大石 ふみ子	教授
	委員	藤本 栄子	教授

## 論文要旨

### 【研究目的】

搾乳中の早産児の母親に対して、乳房の健全さを保ち子どもの成長発達に必要な乳汁分泌を維持促進するために、乳房感覚を強化する乳房自己管理支援モデルの作成を行う。

### 【研究方法】

1. 研究デザイン: 搾乳中の早産児の母親に対する乳汁分泌維持促進のための「乳房自己管理支援モデル案」(以下、モデル案)を作成および試行して、結果を検討しモデルを作成する。
2. 乳房自己管理支援モデル案の作成: 母乳育児カウンセリング支援を対人関係支援の基盤とし、母親が基礎的知識と乳房の観察方法、搾乳技術を獲得するための『乳房の健全さを維持する支援』を行い、母親自らの「乳房感覚」に合わせてわせて搾乳リズムをつかみ、乳汁分泌維持促進するための乳房感覚を強化する『乳汁分泌を維持促進する支援』を実施していくことで、より母親の主體的な乳房自己管理のための支援となることを意図して作成した。モデル案は、文献検討や研究者の臨床経験および2018年に調査した先行研究(加仲, 2020)に基づいて、母親の7つの目標を明示し、各目標に対する支援内容を導き出した。

母親の目標は、「目標Ⅰ. 乳汁生成の各期における経日的変化が理解できる」、「目標Ⅱ. 乳房や乳頭の見かた・触れ方を理解し実施できる」、「目標Ⅲ. 搾乳前準備と搾乳方法を理解し実施できる」、「目標Ⅳ. 乳汁生成各期に応じた今の乳房状態の変化に気づくことができる」、「目標Ⅴ. 乳汁生成各期でおこる経日的変化にあわせた乳房感覚をつかみ行動化できる」、「目標Ⅵ. 乳汁生成各期の乳房感覚がわかり、乳房感覚や1日の生活の中で搾乳のタイミングを調整できる」、「目標Ⅶ. 今までの経験で得た乳房感覚と異なる際に支援を求められる」の7つを設定した。

支援内容は、目標Ⅰに対して①乳汁生成各期における経日的変化の知識を提供する。目標Ⅱに対して②乳房や乳頭の見かた・触れ方を示す。目標Ⅲに対して③搾乳前準備と搾乳方法を示す。目標Ⅳに対して④乳汁生成各期で起こる乳房の変化を母親と一緒に確認と共有し乳房感覚に意識を向ける。目標Ⅴに対し

て⑤乳汁生成各期でおこる経日的変化にあわせた乳房感覚を母親が言語化でき変化に気づき判断できるよう母親と一緒に確認して乳房感覚をつかめているか確認する。目標Ⅵに対して⑥乳汁生成各期の乳房感覚がわかり乳房感覚や1日の生活の中で搾乳のタイミングが調整できているか確認する。目標Ⅶに対して⑦今までの経験で得た乳房感覚と異なる訴えがあった際に母親と一緒に確認する、とした。

3. モデル案の試行：1) 調査対象者：A病院総合周産期センターNICU・GCUにおいて在胎週数27週0日以降～32週0日未満で出産し、母乳育児を希望および研究に同意した母親10名。

2) 調査内容：調査対象者に5種類の調査表を用いてモデル案を試行し、データ収集を行った。「支援内容の実施確認表」：支援者の支援内容の実施状況を記録する。「乳房自己管理表」：乳房自己管理における母親の目標達成状況を記録する。「乳房状態観察表」：支援時に支援者が観察方法に従って確認した乳房状態を記録する。「生活スケジュール表」：生活状況(睡眠、食事など)、搾乳の時間的關係を知るために、円グラフを用いて1日の生活スケジュールを記録する。「搾乳日記」：搾乳状況(時間、方法、量)を把握するために母親が記録する。「半構造化面接」：モデル案試行における調査対象者の評価のためにインタビューを実施する。

4. 分析方法：各データは経時的に経過や言動を記述し分析した。面接調査については、逐語録を作成し質的帰納的分析を用いて分析した。

#### 【倫理的配慮】

聖隷クリストファー大学倫理審査委員会の承認後(認証番号:18042)、調査実施施設での倫理審査の承認(管理番号:R18-040)を得たうえで開始した。調査対象者へは倫理的配慮および体調不良がないかなどを確認したうえで実施した。

#### 【結果】

1. 調査対象者の概要：調査対象者は10名で、母親の平均年齢は28.4歳。初産婦4名、経産婦6名。経膈分娩2例、帝王切開8例であった。児の平均出生週数は30週3日、平均出生体重は1362gであった。

2. 乳房の健全さを保つための『乳房の健全さを維持する支援』による母親の目標Ⅰ～Ⅲの達成状況：支援は全員に実施され、10名中8名が目標を達成し、2名が未達成であった。

3. 乳房感覚を強化する『乳汁分泌を維持促進する支援』による母親の目標Ⅳ～Ⅶの達成状況：乳房感覚に意識を向ける、乳房感覚に気づき判断できるよう母親と一緒に見て・触って確認する、乳房感覚に合わせて搾乳タイミングが調整できるかを確認する、といった乳房感覚を強化する支援を全員に実施した。10名中8名の母親は目標を達成し、2名が未達成であった。うち1名は全ての項目が未達成であった。未達成項目のある母親2名は「上の子がいて1日に6回しか搾れない」や「眠たくて搾乳回数を増やせない」といった個別の事情があった。モデル案の試行により負担がかかり搾乳回数が減少することや睡眠不足感を訴えたものではなかった。

4. 乳汁分泌量:10名中5名の母親は、産後2週までに目標とした搾乳量500ml/日以上乳汁分泌があった。10名中8名の母親は、産後3週までに搾乳量が500ml/日を超えた。また、入院期間中に児に必要な哺乳量を全て母乳でまかなえた母親は9名であり、10名に対する退院前日の母乳充足率は96.8%であった。

**【結論】**

以上のことから、本研究のモデル案は早産児の母親の搾乳期間中の乳房を健全に維持し、乳汁分泌が潤沢に得られる効果があると示唆された。

## 論文審査の結果の要旨

本研究の目的は、搾乳中の早産児の母親に対して、乳房の健全さを保ち子どもの成長発達に必要な乳汁分泌を維持促進するために、乳房感覚を強化する乳房自己管理支援モデルを作成し、調査対象者へ試行し、評価および考察することである。乳房自己管理支援モデルは搾乳中の早産児の母親に対して、乳房の健全さを保ち、乳汁分泌を維持促進することができる支援として期待できると考えられた。

本研究の特徴と新規性は早産児の母親は、母親自身が直接授乳にかわって乳汁が溜まる感覚や排出される感覚を意識的に身につけ、わが子の成熟や回復を待ちながら乳汁分泌を維持促進し、自分自身で乳房の状態や乳房の感覚を判断し、生活のなかで時間調整やタイミングを図りながら搾乳を行っていくプロセスを母親の体感する代表的な乳房感覚として言語化し可視化したことである。

本論文は介入研究であり、博士後期課程における論文としての価値が十分に認められる。また、加仲氏は乳房自己管理支援モデルを研究調査終了後も継続的に実践し、研究的視点をもって推敲を継続していることから、今後の研究の発展にも期待できる。

審査において、修正点を助言し、修正された論文について審査委員全員が合格と判断した。

審査委員会は本論文が著者に博士(看護学)の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。